

18 森枳園宛の書簡類―伊沢柏軒、

小島宝素、喜多村直寛・多紀元琰・元佑等

。町 泉寿郎・小曾戸 洋

安西安周が蒐集した、幕末期の医者 of 書簡が三十七通ある(矢数道明氏所蔵)。この資料は安西自身、研究結果を発表するに及ばなかった未発表資料である。内容は、福山藩医で考証学に長じた森枳園宛の来簡が大半を占め、差出人は江戸医学館に関係の深い伊沢柏軒・小島宝素・同春沂・喜多村直寛・多紀元琰・同元佑・同元昶・曲直瀬正貞・橘宗俊、ほかに大坂の儒医田中華城である。これらの書簡は上記の人々の伝記研究に新事実を加え、幕末期の江戸医学館の学術研究(殊に医籍刊行に関して)に資することが少なくないと考える。以下、書簡から肝要な点をあげる。

①「森枳園宛伊沢柏軒書簡」(嘉永元年二月二十九日付)・

「同」(同年三月二十八日付)

枳園が阿部侯の勘気を蒙って俸禄を失ったのが天保八年二月、三十歳の時。この年五月、十二年ぶりに勘気が解けた。その直前の書簡である。相州浪々中に枳園は変名していたので、この書簡は上包の宛名が「町田玄齋」、本紙宛名が「森立之」「五禽真人」となっている。柏軒は枳園帰郷の際の短刀装束調達の労をとり、また火事や芝居など江戸の様子を伝えている。

②「森枳園宛小島宝素書簡」(嘉永元年九月二十日付)・

「同」(同年同月二十八日付)

枳園が江戸に帰ることを得たのは、医学館での『備急千金要方』出版に校勘者として参加すべく、彼の知友が取計らってくれたからであった。枳園は早速世話役小島宝素らと影写校勘を始めている。『千金要方』「攷異」巻末の校勘中に渋江抽斎の名はないが、「明日之事ハ渋江次第二候」という書簡中の語からみて、渋江抽斎も校勘に加わっていたと考えられる。

③「伊沢柏軒写口上之覚」(嘉永二年十一月)

森枳園の帰参を願って幕府「奥表御医師共」が福山藩の目付に提出した口上書の覚書である。従来枳園の帰参

は嘉永元年五月と言われてきたが、この文面中に「昨年格別之御憐愍ヲ以御門御出入も被_レ仰付」、旁以医学館ニ而御用相勤候身分ニ相成」とあるので、嘉永元年時は正式の帰参ではなく勘気が許された段階であり、森鷗外の『渋江抽斎』その三十六に言うごとく、枳園に医学館御用を勤めさせそれを規模にして帰参を迫った、その状況がこれによって詳らかになる。

④「森枳園宛喜多村直寛書簡」(嘉永五年六月十四日付)

喜多村直寛が自ら木活字を蔵し、多くの書籍を活字印刷したことはよく知られている。枳園の著書『牛痘非痘弁』もその一つである。大部の『医方類聚』印刷(続刊中)のために完成が延引し、種痘関係の本の流行に後れてしまったと詫びている。

⑤「森枳園宛多紀元琰書簡」(安政年間五月二十四日付)・

「同多紀元估書簡」(同八月十六日)・「同」(安政三年十二月三日付)・「同」(万延元年八月三日付)

多紀氏からの来簡は概ね『医心方』影写・校刻作業に關する内容である。元琰はその晩の『医心方』校勘の会に急用のため出席できないので、休会を要請している。

上包の宛名に「道純様／警安様／養竹様」とあり、校訂の人員が解る。また元估は「板木師之方に一葉も無_レ之中略」実ニ手明ニ而困入候旨ニ而候」と、枳園の影写の遅れを注意している。安政三年十二月三日付の元估書簡は、『医心方』二十三巻の影写を急いで校正するように要請し、成稿した海保漁村の序文をこちらに送るよう言っている。万延元年八月三日付の元估書簡は『医心方』の献本用の表紙装訂がこの日、半ばできたと伝えている。

⑥「森枳園宛喜多村直寛書簡」(安政五年一月二十七日付)

過日、枳園が自著『周尺説』の活字印刷を直寛に依頼したことに對する返事である。直寛のところの活字工が小銭をかせぐために勝手に印刷をするので、昨冬以来、昌平坂学問所・医学館・蕃書調所のいずれかの検印がない書物は印刷しないことにしたから、枳園にも検印をうけてきてくれというのである。

以上、これらの書簡は医学館をめぐる医師たちの学術的成果を側面から傍証するものであり、彼らの個性を語って余すところがない。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究室)